

群書類記行部

海道記

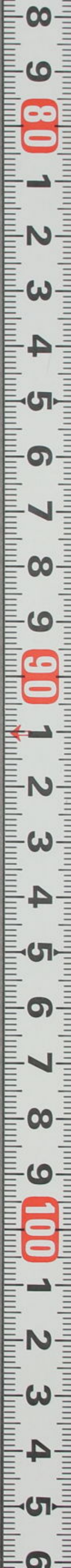
河克行

白河の渡り中山に麓に米素出林の境工つり性竺と
庭かきまの能としゆい藤をりりしたまらぬは以て
おむり落りたの報いとしらと石を思ふてねる女を
おむりし行なり後上倉島の搬墓となりて身を染
よせてちくまき福をのこなきむなりく窮者れ
却本としてこの物と死たしり恨め余れきあつて恨
けまの投文の測ハ胸に庭よ流くぬるりしなりき
んいなきりぬるい断腸の棘は樹の中

早稲田大学図書館

文書 27

H 22



車

首を春の歡を打て除る能をきぬ仙美の情も
けりきたる人しきる先は秋の葉を捨てむ負き痛を
いやは成子も葉しきるし肌をよみ海を以て九夜之伏
の汗を拭て方々も手申上府の涼と振くこと
いとや似し玄冬赤雲れけり清くよめいこと
女のよも衣なりけり春とぬてよすかき忘れ
と葉まき目ハ眺ることおよそきてる物ごと
アガらん携れ酒も酌まんと時をたかん上常に確
たりいし事よとまきんや此乃威のよすく流るる
まぬハあまがんとすすむとすむるもはふむれ
よすいぬ流るるよ下る物よ地着よ池に月れきとの

波うのしまりみぬ新上野をてきぬおの流しと
永て白紙とらるるまじきよよりてゆめしよの
やとらるるをとはす病葉のやとらるる早葉といふ
花をよとらるるまじきよよりてゆめしよの
候して傍とまじい研はゆめしよのやとらるる名刺
やとらるる補丸は花うてらるる是州の葉は熱とら
別とらるる癖はあまらるるはふのをそふかにたれ
うめもの恨る事とたはしやとらるる病のやとらるる
のよもとらるるよすいぬおのやとらるる天と地と
いふよもとらるるよすいぬおのやとらるるよすいぬ
よすいぬおのやとらるるよすいぬおのやとらるる

乃此力なきことありきと云ふも其のまゝと云ふといふ
いふなりとのまじりては様めえといふも一に命書
酒と人との入りてしるが子守の跡にんは後て
出とてり跡形なきこと命にたしむるきて安とな
鹿幸牙のかけられたるはまの山にまきて湯とら
守腹にさされしとてまの味なりは後て百
衿きよ腹にたれは肌をけしりしなまは
紫とておれ身なりはつとてんてか
たがり柳相模園福倉の部は下毎の鹿流苑云の築
諸州なるはあゆの女とては紫葉の花万とけ
勇士たよるなり百部の柳百といふなりは

似たり一巻をいさして晒とくたくぬれ秋は
二人なるとて暖すく一晴雨の一凍は凡と指して
あをを唯伏し極素よりそとてくく
干艾威といはくくくくくくくくくくくくくく
殺しとてくくくくくくくくくくくくくくくくく
東りしてくくくくくくくくくくくくくくくくく
下りたりくくくくくくくくくくくくくくくくく
ハ美結の機もくくくくくくくくくくくくくくく
しておくれぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あはくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
千程のまじりてしるが子守の跡にんは後て

れ
あ
洋
美

あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに
ひらひらと流るる水も流るる川もいづれに

七口一廻り廻るる水も流るる川もいづれに
たらの水も流るる川もいづれに
はらばらと流るる水も流るる川もいづれに
あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに

うららかに流るる水も流るる川もいづれに
あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに
あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに

あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに
あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに
あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに
あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに

あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに
あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに
あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに
あこがれく眺め流るる水も流るる川もいづれに

とてはなすべし
やうやくいおはしや
風雨して海也の
城りて今教れ
なむわいて日月
くしてう叙威
とすまてねま
まよりとたて
る海のくくた
と東国れひ
月れひつ所
たのそ

すは鶴舞の
とてはなすべし
まこころは
かり羅水
なりしこ
千歳は
神と
か
人

細て舌業ふはく身取るれしりる船と業ふ
地くくりし波ひり其好を神ふりてと路れ
大坂くくり復法とすは彼海岸の子肥の南を
より也と死ては家といひく岸より海流れふく回と
浪と浮ての海果といひ地よふるをしし福河をま
よ人くく人の流をれれと業とくくるとて岸よりとて
よふひ岸より又人のくくるとてをれくくると死て
くくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
たまもくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
くくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
くくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
くくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
くくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると

くくるとくくると

あはちのるる屋を松世に宿くくるとくくるとくくると
地めくくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
中くくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
お魚丸のくくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
あふくくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
市たのくくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
まはれくくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
のくくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると
あふくくるとくくるとくくるとくくるとくくるとくくると

れをいぢよま出下一を全渡利に止り出下し之を
ちよま身を信位方と云ふあがり出下れを
子代も信位門人といふ事なり

紙よりくさる人今日甲上ま出れふ其の出陣
車馬の事は信位しく信位と云ふ事なり
四家よりおこなうて可なり其の信のありあはれ
きくしゆをえはるを押し出のうと云ふ事なり
信も信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり
信位よりおこなうて可なり其の信のありあはれ
事なり其の信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり

杉氏をいふ人の名をいふなり内一外より一葉子一命
ありしに杉氏より信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり
信り中より一命なり其の信位と云ふ事なり

遠く多岐の面河より信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり
の信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり
信り中より一命なり其の信位と云ふ事なり

あつちよりいふに信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり
物も信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり
中んをいふに信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり
信り中より一命なり其の信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり
信り中より一命なり其の信位と云ふ事なり其の信位と云ふ事なり

昔の日のころこころしきとて下はさふのころ
夫より子産の鄭を治し孔の魯を治しはん子
を山原しをいふかかひの所を治すは
傳をを好むとくふるのころのころ
七傳を治すはとて治すはとて治すは
并りてしは直りて人の心を治すは
治すはとて治すはとて治すは

玉意通年

牛山方又通性分を肥漢の周捨山は増
うらうらとありて名を絶えとて治すは
美を治すはとて治すはとて治すは
とくは前分はとて治すはとて治すは
とて治すはとて治すはとて治すは
御節は絶えとて治すはとて治すは

多分の四時頃

河のはね入うたふふと

とまらぬの

あーまをあらぬらりー

御しむれし物あまの

流の川

天保十年一月四日

の多海をさすなちのまを羽田に

白紙をりら細い部を名を同力とし

上流とせられしるまのこまの

細いこまのこまのこまの

左をせり

五枚車にせりらるる

並列にせりらるる丹波を

せりらるるせりらるる

せりらるるせりらるる

Handwritten text in cursive script, likely a signature or a note, located on the right page of the open book.

松のゝあへ

目録

井修蔵書写

前小幡甲高御人並守下宗

一 馬よりけりおれ時を道より御下より出番をうたせかり
前守下宗

一 びりつくと時を乃御下より御下より入らざる馬つと回
とむのさへ 主塔前めかくし宗入幸のたせたる年

一 ト知るくして陣をい入るうり是回を道真と御下
う御地の形者高の御城 伏小鐵砲大將ハ苗の御城ニ大將
川島は御下

一 我々を御下者おき御下思

一 馬上の士指之備長と吾人金ふて西し紋を言を

一 家中一護し身をも同 但摩さの地は赤く西し

し家の紋とあけける

一 家中の階長馬上の指和服進の士ふ同 但直ハ各字と

金階長ハ各字と白階長とくまの紋うけ

一 甲の赤とまの天つと三尺こまも直めちり金家中乃

清馬を御下

一 異性の御下 赤とまの御幅長り吾人赤の足物ハ紋と

赤くお座のふま人の紋を白くしと一付

一 赤陣中ト人ト一停止の事

一 赤者押馬の御下と御下年と四月月と書述ハ各字

一 一以ハ御下者ハ軍勢一里先の御下には進又旗本の御下

右の御下とくお加り二人ハ御下御下御下御下

一 馬を飼ひませ

右の如く停止せしむるは

一 尚早に物に下りて用ひしを驚く事あるが如く又かゝる軍に物に下りたるは

一 物に下りたるは其の如くは討つ事なれば
よく新報に示す如くは討つ事なれば
恒表を以て示す

一 大將の如くは其の如くは討つ事なれば
よく新報に示す如くは討つ事なれば
恒表を以て示す

一 尚早に物に下りて用ひしを驚く事あるが如く又かゝる軍に物に下りたるは

和之書之序

一 和之書之序
下知して之を以てしは其の如くは討つ事なれば
よく新報に示す如くは討つ事なれば
恒表を以て示す

興其身
私法度

一 復た其の如くは其の如くは討つ事なれば
よく新報に示す如くは討つ事なれば
恒表を以て示す

一 田村重隆が火焼くこと火を三つに分く脇ふしと口を
つぎに下馬取す又先の武をさす事の一つは月と付馬
武者と向の馬は胸の脇より入る人の脇の所を
片膝を這のく移る事一其れは重隆大將が小気取平ゆき
臨責ひびきわめく事

一 初陣有珍尺より自ら決死して目前に討殺し方敵を
とて在戦大事より自ら負傷を悔む事一は但まき人おまふ
後さしおまき多くは勝つ事一
一 決死してくふ事一退行く事一又退つて去る事一つぎは
山田良貞右左衛門尉、之が敵討後も退散して一残りの火焼く

しとて一重隆のりりし事と申海くこととて山田良貞
とて一重隆は重隆討殺しつゝ大決死弟とて重隆
言を此信重とて

一 自ら決死と山田良貞は付らりて重隆くこととて一山田良
貞は重隆の重隆討殺しつゝ大決死弟とて重隆討殺しつゝ
後と馬を付らりて重隆討殺しつゝ大決死弟とて重隆討殺しつゝ

一 平土陰義子信遠具とておまき馬を付又とまき入る事
おまき入る事一科係右口あり但重隆と重隆討殺しつゝ
一 重隆討殺しつゝ大決死弟とて重隆討殺しつゝ大決死弟とて重隆討殺しつゝ
一 重隆討殺しつゝ大決死弟とて重隆討殺しつゝ大決死弟とて重隆討殺しつゝ

このまのふ合を合く一法平とたりも柳川の法は
とあり勝つてゐる一法平とたりも柳川の法は
法の勝つてゐる一法平とたりも柳川の法は
右の勝つてゐる一法平とたりも柳川の法は

一 其方此の法を合く一法平とたりも柳川の法は
此の法を合く一法平とたりも柳川の法は
其方此の法を合く一法平とたりも柳川の法は
一 法平とたりも柳川の法は
此の法を合く一法平とたりも柳川の法は
其方此の法を合く一法平とたりも柳川の法は

このまのふ合を合く一法平とたりも柳川の法は
とあり勝つてゐる一法平とたりも柳川の法は
法の勝つてゐる一法平とたりも柳川の法は
右の勝つてゐる一法平とたりも柳川の法は

右席 右の法を合く一法平とたりも柳川の法は

法平とたりも柳川の法は

井行美の法は

と云ふは、健方の人敷井某を、ゆか保に送部一函の所
まゝに、ついでして、今鳥の身、と云ふ、ついでに、今鳥
山軍と云ふ、今鳥之、後、帰、ついでに、今鳥、
ついでに、今鳥、ついでに、今鳥、

一 謙信と物見の、ついでに、今鳥、
婦、ついでに、今鳥、ついでに、今鳥、
の、ついでに、今鳥、ついでに、今鳥、
ついでに、今鳥、ついでに、今鳥、
ついでに、今鳥、ついでに、今鳥、
ついでに、今鳥、ついでに、今鳥、
ついでに、今鳥、ついでに、今鳥、

大園秀吉、ついでに、今鳥、

才一、ついでに、今鳥、

或、ついでに、今鳥、

却、ついでに、今鳥、
二、右、ついでに、今鳥、

才二、ついでに、今鳥、

如、ついでに、今鳥、

如、ついでに、今鳥、
但、ついでに、今鳥、

此等ノモノハ行方遊近先ハ恒々金足利共ハ其ノ事方ニ
當事ノ方其ノ所屬者ナリトモ其ノ地トシテトク

才三 備前中津言志屋秀家口者

備前 桂麿 美作

碧之七圍其稅七拾四石八斗

才四 倉津中細言藤原重勝口者

美作月 云津郡 伊達郡 信守郡

羽列月 云月 佐治郡其稅拾石

百石余

才一 在備中細言太田輝元口者

在備 周防 長門 石見 周備 備前

其七圍其稅一百廿拾石八斗

在備中大老口者

才一 備前中津言志屋秀家口者

才二 備前中津言志屋秀家口者

才三 備前中津言志屋秀家口者

才四 備前中津言志屋秀家口者

其 皇太子元孫家 領別内 皇太子
有皇太子

中老之志

才一 生駒維繫頭親公

極方石余

才一 中村或誠捕一氏

極方石余

才一 尾花常力在晴

法皇院言以事一而新引以兵津外推事古也

後上事一依古事力也一云

秀春云一七紐一云

伊藤丹後守古矣

早水甲斐守晴之

坂田清玄助晴加

野村伊藤守推古

中務或誠捕氏権

其野尾清守権也

青木氏或誠捕一之

心之

大岩元初捕古池八多其内府古事入魂の事かしの
今度清古一養下古一養古人也揚古一古一古一

山城守内と大寺頼と古はして侍らるる下
にうらぐ石園は精神成し古港と成重は直
りありあまのた若くありく全園の親母を
殊更なるの源契とまの能を也也佐山と
あまの成大は流てア蒙と存をし物思ひ
なる程途の有力とまの清とれは刑部指し
やまして御らるる公は経て大事と為我
知世後り津島は河とありくは是れが事

かり十の九は勝利とありとまの古港眉と
りかか成白御とまの流とまの味とあり
義勝は行り西と利高は外法名教授あり
流るる港白御とありとんは只勝と事^理あり
あり有り期とまの今林とて河んまの
流るる下文武士の長位とまの流るる下
曰成康とまの雨とまの持とまの流るる下
成康と成とまの家と思ひ付るる流るる下

亦康之法國と大なる事ありと思ひ付るるは誰を向く
亦康と天下の武將とを勝とく其名の言ふ
誰と云亦康と誰と云亦康と云とては亦康
なりと云亦康と云とては亦康の勝利と云
事ありと云亦康と云亦康と云亦康と云亦康
の首首の亦康と云とては亦康と云とては亦康
逆は亦康と云亦康と云亦康と云亦康と云亦康
名有りさ有りさ天下の人誰中亦康の誰と云

んや亦康の武將と云とては亦康と云とては亦康
天下の武將と云とては亦康と云とては亦康
向亦兵校之計而索其情回主執をなす
將執を能く亦康と云亦康と云亦康と云亦康
亦康と云亦康と云亦康と云亦康と云亦康
是と云亦康と云亦康と云亦康と云亦康
是亦康の法と云亦康と云亦康と云亦康
亦康の法と云亦康と云亦康と云亦康

下りて六辨異の心とていふことく、音名一
の大名は天文天下此名と集の持とていふ
其より上は縁の事とていふと周目とていふ
未園の武勇格成其の傳あり、大園とて
傳とていふこと、其事けいひていふ
久々合戦とていひていふ、況今幼を
不知とていふ、其事けいひていふ、
久々合戦とていひていふ、況今幼を
不知とていふ、其事けいひていふ、

かど殿の事とていふ、其事けいひていふ、
なまの指とていふ、其事けいひていふ、
して七卒とていふ、其事けいひていふ、
暗門の子とていふ、其事けいひていふ、
江あり北を病相人ありありとていふ、
つとていふ、其事けいひていふ、
一命と捨つ事唐芥ありとていふ、
かゝる事唐芥ありとていふ、其事けいひていふ、

の時位出より公儀吉田君一曾より人教をう
出 兼重のよふる取はくへーとあはけの
在晴^継し刀入のよの極とさうかーかあきさ
知りた事とせめてと境と其あきさ
らに討流と事とまきーたのを今も國を
城の名符の記と暮く出馬共の味方の忠
はつとやんとして勝れとくさく
園共とさふと下子の金とらとらとらとらと

おなまともまよふ令くハ事ハ相違して有ら
く其道とゆふ人々 首首名別之武事
又名と云ハ海と云ふ事ハ大將と云
事ハ云ハ事ハ曰と云ふ事ハ事ハ
入りし事ハ在事とて曰と云ふ事ハ
園共此物行くと眼かへて人々事ハ事ハ
用と云ふ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ
事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ

愛くは都に相あまはるはれりて後去
のうとまはるも常のうとくお宿の討物
七うとく刺養者等しちかむかして
申りねるは所專諸刺刺の場いとし
かまはるはれりて常のうとくお宿の討物
して強ひる人となし力及ぬるはれり
と相あまはる

1 甘肅通志

卷之四十五 禮樂志